

芋峠古道から高取山へ



コロナ終息願うカカシ達

9月30日高齢者3人、車で出発。8時前に明日香村稲渕に。棚田を舞台に毎年開かれてきた「彼岸花まつり」はコロナ禍で中止だが、「案山子コンテスト」は行われている。今年のテーマは「絆」。「志村けんさんのバカ殿」の巨大カカシ、福祉・介護施設の皆さんで作ったほほえましい作品などが、色づき始めた棚田とヒガンバナを背景に点々と並んでいる。時節柄“コロナ終息”“家族の絆”“世界の連帯と平和”を訴えた作品が多い。ただ残念なのは異常気象のせい、いつもは一斉に開花するヒガンバナにばらつきが目立ち、すでに色あせた花もあれば蕾のものもある。何よりも花の数が少ない。黄と白のヒガンバナ、ツルボの花をも見て、車に戻り、芋峠古道に向かう。



趣伝える芋峠古道

芋峠に向かう県道15号線は紆余曲折しながら杉林の斜面を上っているが東に大きくヘアピンカーブした所で並行している古道と接している。ここに岩に刻まれた役行者像があり、この地点が「行者(辻)」と呼ばれている。道路わきの空きスペースに駐車し、9時10分芋峠古道を歩き始める。



この道は古代に大和盆地くんなか(国中)と吉野上市とを結ぶ道として

開かれ、都のあった飛鳥と吉野離宮とを往来する最短経路としても使われた。

じんしん壬申の乱(672年)前後に持統天皇(女帝)はこの道を34回も通ったと案内板に書かれている。

間もなく三軒茶屋跡に着く。往時の店の跡地か、広い平坦地がいくつか見受けられる。杉林の中の古道は緩やかに蛇行しながら上っていく。突然、一人が「あっ!リス」と小声を発した。見ると少し前方の杉の樹幹を2匹のリス(お腹の色が確認できなかったが小さかったのでニホンリスと思われる)が昇ったり、降りたり、廻ったりと敏捷に動きまわり、やがて倒木の上を駆け姿を消した。

←ツルボ

9時40分芋峠着。ここから東進すると芋峠山頂(標高497m)を経てりゅうざい竜在

とうげ峠に出、そこで南に下れば吉野町に、直進すればとおのみね桜井市・多武峰に至る。



日本三大山城のひとつ高取城址

私たちは西側の階段を下って県道を横切り、向かいの山道に入る。この道こそ高取城に通じる道であり、小さくアップダウンしながら西に向かっているが、途中で高取山林道に近接しており、そこから林道を歩くことにした。

林道は曲がりくねり、所々で谷側が開けて、東には高見山が、南には大峰の連山が遠望できる。花は少ないが、路傍に6輪のホタルブクロが、林の中に一本のギンリョウソウ(時期的にはギンリョウソウモドキか)が、林道終点到2株のアケボノソウ(リンドウ科



センブリ属)が咲いていた。

再び山道に入り、しばらく歩くと石垣が5mくらいの空間を挟んで対面する堀切が現れた、高取城の東方面防御施設の先端だったのだろうか。同様の堀切を見、まもなく「吉野口門跡」を通過、道は平坦になるが、山側には険しい崖と高い石垣が続き、谷側には峻険な急斜面の各所に石垣が設けられている。なるほど“難攻不落”だろうが、この難工事をさせられた当時の民衆の苦難が



↑アケボノソウ

思いやられた。

やがて道は本丸にかかる。ここでも高い石垣が幾重にもめぐらされ、その間を何回か方向を変えながら進むことになる。

11時30分 本丸跡に到着。「日本最強の城」の幟がたっており、カワチブシが美しい花を見せている。標高は583.6m。同行者二人は「高取城跡には何回か登ったが、今日のコースを歩いて“日本最強の城”というのがよく分かった」「これは郡山城よりすごいわ」と述べていた。

昼食を摂り、12時に下山開始。13時半芋峠に。芋峠古道をくだって13時50分行者辻の駐車場所に戻った。



↑カワチブシ(トリカブト属)

芋峠の名に込められた疫病阻止の願い

この峠名は以前から気になっていた。角川書店の「日本地名大辞典」(奈良県)を開くと「近世には疱瘡峠と書いて、いもとうげと読ませることもあった」と出ている。そこで古語辞典を見ると「いも【痘】(名)『いもがさ』の略。」とあり、「いも一がさ(名)ホウソウ(=病氣ノ名)の古名。」とあり、広辞苑にも「いも【痘】疱瘡、と書かれている。疱瘡=天然痘は人類を苦しめた恐ろしい感染症の一つ。日本でも平安時代からたびたび流行して人々に恐怖を与えた。そのため、この疫病に罹らないようにと、全国各地で、種々の行事や祭り、習慣などが生まれた。

いも峠もその一つで、芋峠神社、役行者石像と共に疫病侵入阻止、退散、患者の早期快癒などを願ったものと思われる。各地にある「疱瘡地蔵」も同様の物と考えられる。

なお、「いも」と呼んだのは、この病の患者にできる痘痕(あばた)を「芋の形状」に見立てたものようだ。

※菅内閣の学術会議への介入は余りにもひどい。皆で抗議を。

↓作品名は「アマビエナス」。指揮官の看護師さんがアマビエたちを激励

